

自然・農，人，社会との交流を通じた大学生の成長

露崎 浩

秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科

University Students' Growth through Interchange with Nature, Agriculture, People and Society

Hiroshi TSUYUZAKI

Department of Agriculture Business, Faculty of Bioresource Sciences, Akita Prefectural University

Keywords: 感動, 交流塾, 自主性, 自発性, 人間力

(スライド1) まず、今日の構成についてです。第Ⅰ部が文部科学省から支援を受けて行った事業で4年間行いました。第Ⅱ部は、その後継事業として秋田県立大学(以下、県立大学)で行っている学生交流事業の事例について報告し、まとめたものを加えてお話をさせていただきます。

1. はじめに

(スライド2) 大学を卒業して30年以上になって、同窓会などがあると、「懐かしいね」、「大学の頃は良かったね」なんて話もするのですが、それに加えて、多くの友人は「大学時代があって今がある」といいますか、「大学時代の経験がその後の人生に大きな影響を与えている」ということを話すのですが、私もその通りだと思っています。ある人は「大学時代が原点だった」と言いますし、私自身、「何が大学時代に身についたのかな」と考えてみると、「思考と行動様式の骨格といえるようなものが作られたのかなあ」というふうに思っています。

そして大学には、ご存じの通り、正課と課外活動があるわけですが、今日お話しするのは、そのうちの課外活動です。課外活動での「大学生の成長の舞台作り」と「大学生の成長」についてお話をしたいと思います。

なお、スライドの背景の写真は県立大学附属フィールド教育研究センターの写真です。

2. 第Ⅰ部「薫風・満天フィールド交流塾(文科省支援事業)における大学生の成長」

その当時、文科省は「大学生の人間力を高める必要

があるのではないか」という問題意識を持っていて、「人間力を高めるためのプログラムに対して、大変多くのお金を出す」ということになりました。そこで、全国の大学がこぞって手を上げたわけです。

自然・農、人、社会との交流を通じた大学生の成長
構成
はじめに
第Ⅰ部「薫風・満天フィールド交流塾(文科省支援事業)における大学生の成長」
第Ⅱ部「全国農学系学生交流(県立大学事業)における大学生の成長」
まとめ

スライド1



スライド2

2018年12月30日受付.
本稿は、人間・植物関係学会2017年大会シンポジウム(6月24日、ホテルサンルーラル大湯、秋田県大湯村)における講演の録音記録をもとに、大会長(神田啓臣)が原稿を作成し、講演者がチェックしたものである。

(スライド3) そのうちの1つとして、県立大学では、薫風・満天フィールド交流塾という名前をつけた塾を考えて、その塾を実際に実施しました。その目的は、今日のタイトルにもなっている「自然・農との交流」、「人との交流」、「社会との交流」を通じて学生を成長させようというものです。塾の場としては、「(スライド2の写真で見た) フィールド教育研究センターとか、大潟村をはじめとする地域というのが塾の場である」というように考えて行ったプログラムです。

スライドの右上に「第Ⅱ部」と書いてありますが、この部分(全国農業・農村学生フォーラム)は文部科学省の支援が終了した後も継続していきまして、第Ⅱ部で改めてこのフォーラムについて紹介していきます。

(スライド4) 交流塾では、本部長を学長としています。秋田県立大学は、大潟村の大潟キャンパスと秋田市にある秋田キャンパス、さらに県南の由利本荘市に本荘キャンパスがあります。交流塾の実施体制は、大きく分けると秋田・大潟キャンパス(秋田キャンパスと大潟キャンパス)と本荘キャンパスの2か所で塾

運営チームを形成して、教員や職員が学生の成長を促すプログラムを実施しています。

支援期間は2007年から2010年で、最初の年は、文科省から採択されたのが9~10月頃だったこともあって、秋田・大潟キャンパスだけで活動を開始して、次の年には本荘キャンパスも加わったということです。

支援終了後は、学生交流事業という名前に変わり、いろいろな教育支援のプログラムが現在もなされています。

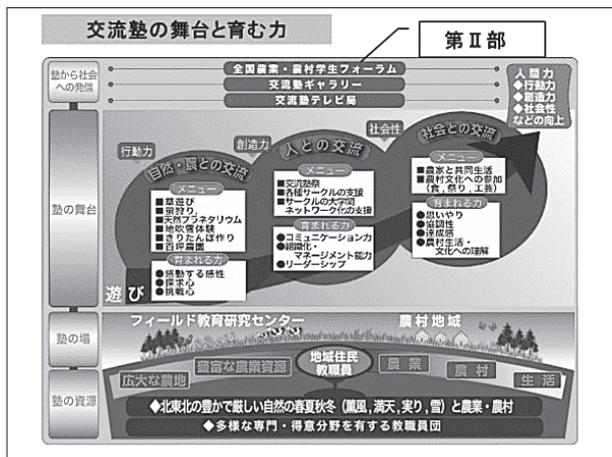
(スライド5)「自然・農との交流」についてです。「こういうことをやったら、学生の成長にどう結びつくのか」なんてそんなに難しいことを考えずに、先生方が各自の特技を活用して、「先生と一緒に学生を外に出そうよ」という具合でやったものの中にはあります。

溪流釣りは、私が学生を連れて行きましたが、釣りそのものをやったことがないような学生をいきなり溪流釣りに連れて行くのは大変なことになるのですけれども、学生にとっては初めての経験が大変多くありました。

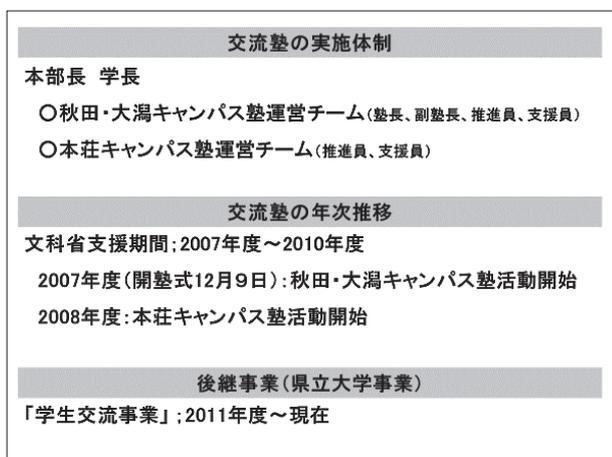
左下のボートは本荘キャンパスでの取り組みです。

右下は栽培ですけれども、大学の正課の授業であれば多分この写真のような状況になることはないと思います。写真はジャガイモの収穫ですが、周りが草だらけです。学生が自分でジャガイモを作りたいということで始めましたが、植えてから収穫まで多分放っていたようで、ヒエ類が大変大きくなっていて、学生は「放っておけばこんなことになるんだなあ」ということに気づいて作業しているんじゃないかなあと思いました。

(スライド6)「人との交流」ということでは村づくりを学生達に楽しんでもらいました。



スライド3



スライド4



スライド5

フィールド教育センターは大変土地が広くて190haもあるので、「いくらでも土地を使っても良いよ」と許可がでましたので、①や②のような具合で、学生達が「ここにログハウスを作ったり、ここに木を植えたり」というように、計画を立てました。

その計画をもとに丸太小屋を作り始めました。③と④は作っているところです。最初のうちは、20人から30人くらいの共同作業なのでチグハグな作業なのですが、そのうちそれぞれの役割分担みたいなのができて、それをリードするような人たちも出てきて、⑤のような具合で完成しました。完成した時の学生達の達成感が非常に大きかったのは間違いありません。

今(⑥)は「さっとこ村」という名前がついていて、そこに、大潟村の村長さんみたいに村長さん、つまりサークルのリーダーがいます。その村長がいろいろな企画を、私達を困らせるような企画を持ってきます。今年一番私が困ったのは「豚を飼いたい」という企画でした。フィールド教育センターでは牛も飼っているのですが、そこに豚を飼うなんてのは、衛生面とか安全面とかで非常に大変なのですけれども。ともあれ、1頭なのですけれども30キロくらいの豚がやってくるようになっていきます。まあそんな具合で、放っておいても学生が「こういうことやりたい」と思ってくれるような場があるということは良かったなと思っただけなのですが、畜産を担当している先生には「また悩みの種が1個増えてごめんなさい」と謝っているのですが。

(スライド7) (1)と(2)は夏祭りを開いて、大潟村の幼稚園あるいは小学校低学年の子供達を招いて遊んでいる様子です。(1)は気球を上げて、普段上から見る事のない自分達が住んでいる大潟村を見たらおうという企画です。気球に書かれている「フィー

ルド交流塾」という立派な文字は、学生達が一生懸命作ったもので、なかなかきれいにできています。その右上に汚れのようなものが見えますが、これは最後に記念として1人1人が手形を1つずつ付けたということで、学生9人分の手形です。

右下の写真は、男鹿半島にある加茂青砂地区の盆踊りに加わらせてもらった様子です。その次の日は、学生達が「加茂ライブ」と呼んでいるイベントを開きました。廃校となったところで、日頃の音楽の練習の成果を発表して、地域の方々との交流も進めました。これは3年間続きました。

(スライド8)これは、「人、社会との交流」ということで、県立大学の学生が他大学の学生を招いて(①)、農家に行ってお話を聞いたり(②)、農作業をさせていただいたり(③)、それらを踏まえてグループディスカッションをし(④)、そしてフォーラムを開催(⑤、⑥)した様子です。フォーラムの会場そのものが広いのであまり人が多くないように見えるかもしれませんが、このときは高校生もたくさん来て、計50人



スライド7



スライド6



スライド8

くらの人の前で学生が発表をし、新聞記事にも取り上げてもらって、学生達の自信が相当増しました。

(スライド9) 以上、交流塾における大学生の成長についての事例をお話ししました。まとめますと、自然・農の体験については、そこでの感動や気づきというのがあって、自発性が生まれた学生達が多く見られました。また、集団で活動するときに、人にいわれてやるというのではなくて、自分から役割を見つけて、その役割を担う、あるいは協同する。そういった学生達が多くいました。

計画の達成により得られる「やればできるんだ」という自信は、20歳前後の学生にとって重要なことではないかなと思います。自信過剰の若者もたくさんいるのですけれども、そうでない人も少なくなくて、そのような学生時代に自信を持たせるということが重要なのではないかなというふうに思いました。

一番下は課外活動についてです。正課である授業にはなかなか出られにくい学生が、こういった課外活動に行き、少しずつなじんでいって、正課の授業にも出るようになって立ち直りをしたということも複数あったことを聞いています。

以上が第一部となります。

3. 第Ⅱ部「全国農学系学生交流（県立大学事業）における大学生の成長」

第Ⅰ部は写真が多かったのですが第Ⅱ部は写真が1つありません。先程説明した「本学の学生が他の大学の学生をこちらに呼んで…」という活動の2012年度における事例について、どんな具合に進んでいったのかということからお話ししていきたいと思います。

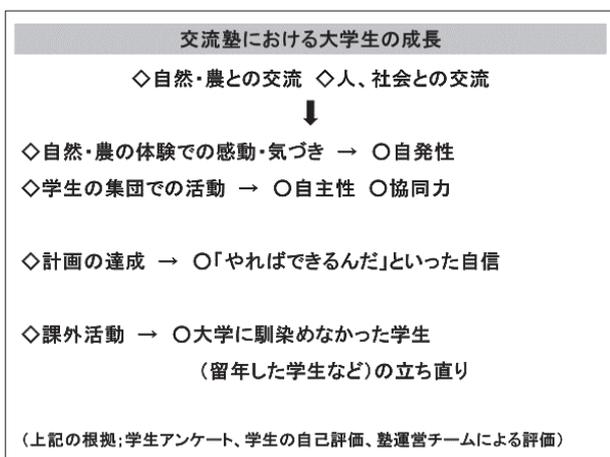
(スライド10) まず最初に県立大学の学生が全国農学系学生交流の企画書を生物資源科学部学生委員会に

提出します。その企画書は交流の概要・ねらい、実施の計画、そして「これだけお金がかかりますよ」という予算計画も含めたものです。その提出を受けて、学生委員会、そして教授会による承認ということになるのですが、実はこの学生委員会がなかなか厳しくて、「この部分はちょっとどうなのか」みたいなことで、毎年、何回か差し戻されるのですけれども、そういう時には、学生を支援している私も学生と一緒に頭をひねりながら「こういうふうにしようか」というようなことをやっています。とはいえ、最終的には承認されるのですけれども。

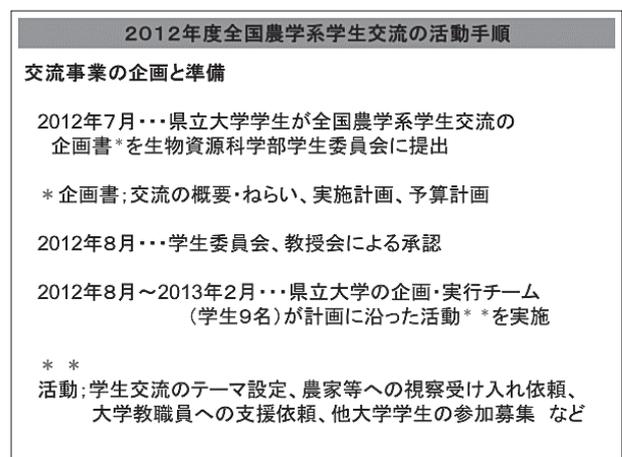
その承認を受けて、県立大学の企画・実行チーム（当年度は学生9名）が、計画に沿った活動を実施しました。活動というのは、まず学生交流のテーマ設定、もっとも企画を作る段階でだいたいテーマは作れているので、もうちょっと具体的にしていきますというようなことをやっています。さらに農家などに視察受け入れの依頼をし、大学教職員への支援の依頼もし、また他大学学生の参加募集などもします。

私達教員のように、例えば本日のような学会の開催などを何度もやっていけば、そんなに難しくないことですが、初めての学生にとってみれば、全くもって大変なようで、本当に苦労して終わるとへとへとというような具合までやるのです。それでも学ぶことが多いのでしょうか。私は、誰にも「やらなきゃいけないよ」と言ったことはこれまで一度もないのですけれども、今年もまたやるということです。

(スライド11) 具体的な内容を説明します。この年度は「リアルな農業を見つめ、理想の農業を考える」というテーマを掲げて、大潟村、あるいは大潟村にあるキャンパスを主会場として実施されました。学生の数は他大学の学生が9名ですから合計で18名となり



スライド9



スライド10

ます。

1日目は大潟村の農業協同組合長の講話を受けて、2日目は大潟村の農家の視察、大潟村の米を販売している株式会社の視察、大潟村の米粉の食品を製造している株式会社の視察、さらに三種町のキノコを生産する有限会社に行っています。

そして、その日の夕方から3日目の午前中にかけてフォーラムの発表準備ということで、まあ忙しいわけですが、夜遅くまで頑張って取り組むわけです。そして3日目の午後にフォーラムを開催したということでした。

(スライド12) フォーラムの内容です。第1部は、参加学生はいろいろな大学からきていますので、その学生達のそれぞれの大学での取り組みの発表です。これが非常に面白いです。このときは鳥取大学と明治大学の学生が自分達のサークル活動を報告しました。

第2部が「リアルな農業を見つめ、理想の農業を考える」というテーマで、1・2日目の視察を踏まえた理想の農業について、各班ごとに発表しました。例え

ば、1班は「戦略を持って工夫し創り上げる農業が理想の農業だ」、2班は「特徴ある取り組みのある農業」、3班は「人とのつながり（農家の間、あるいは農家と消費者の間）を作り、盛り上がりのある農業が必要、加えて次世代を担う子供に伝えることのできる農業が必要」、4班は「地域の自然環境を活かした農業生産、それをアピールポイントとする商品を農家と企業とで連携してつくる農業」ということで、2日目午後とこの日の朝をかけて「よくもこんなに頑張って考えられるなあ」と思っていました。

(スライド13) 4日目に参加学生合計18人に対してアンケートを採りました。「この学生交流が契機となって、今後自身のどのような能力等が向上すると思うか」という質問を、選択肢を示してそこから複数回答可として選んでもらいました。また、「参加して学んだことなど」を自由記述してもらいました。

(スライド14) 「今後自身のどのような能力等が向上すると思うか」という質問の結果です。左側の「農業の知識」から「人と交流する力」まで選択肢があります。

2012年度全国農学系学生交流のテーマ、交流内容

学生交流テーマ：リアルな農業を見つめ、理想の農業を考える

期間：2013年2月18日～21日(3泊4日)
 主会場：秋田県南秋田郡大潟村 県立大学大潟キャンパス
 参加学生：秋田県立大学学生9名(企画・実行チーム)、他大学学生9名 計18名

交流1日目…大潟村農業協同組合長の講話受講
 交流2日目…視察：
 農家、米を販売している株式会社、米粉の食品を製造している株式会社(以上、大潟村)、きのこを生産する有限会社(山本郡三種町)
 交流2日目夕方～3日目午前…フォーラム発表準備
 交流3日目午後…フォーラム開催

スライド11

参加学生へのアンケート

アンケートの質問

Q1. 「2012年度の学生交流が契機となり、今後自身のどのような能力等が向上すると思うか」(選択肢から選択、複数回答可)。
 Q2. 「2012年度学生交流に参加して学んだこと」など

参加学生の全員(秋田県立大学生9名、他大学生9名)から回答

スライド13

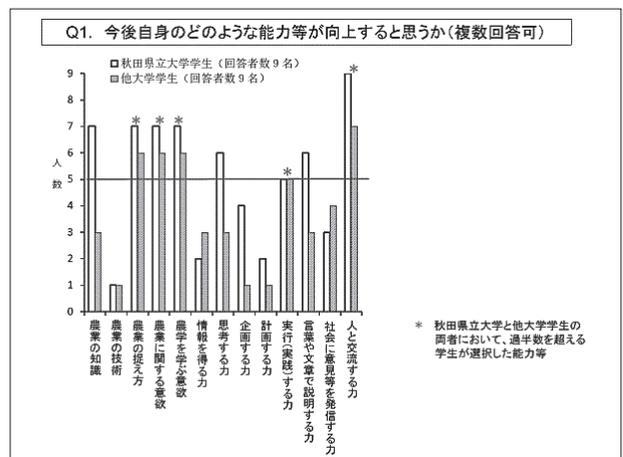
フォーラムの内容

第1部(個人発表)
 参加学生の各自の大学等における農業に関する活動紹介
 ・鳥取大学学生発表：サークル「農村16きつぷ」他の活動紹介
 ・明治大学学生発表：サークル「いろり」の活動紹介など

第2部(班発表)
 テーマ「リアルな農業を見つめ、理想の農業を考える」
 (1・2日目の視察をふまえた各班の「理想の農業」の発表)

1班：戦略をもって工夫し創り上げる農業
 2班：特徴ある取り組みがある農業
 3班：人とのつながり(農家間、農家-消費者間)を作り盛り上がりのある農業。次世代を担う子供に伝えることのできる農業
 4班：地域の自然環境を活かした農業生産。それをアピールポイントとする商品を農家と企業とで連携してつくる農業

スライド12



スライド14

白く抜いた縦棒が秋田県立大学の学生9名、色のついた縦棒が他大学の学生9名です。過半数は各々5名となりますので、5名のところに横線を引いてみたわけですが、県立大学の学生も他大学の学生も両方とも過半数が「向上すると思う」と答えた選択肢にアスタリスクを付けました。それは何かというと、「農業の捉え方」、「農業に関する意欲」、「農学を学ぶ意欲」、「実行(実践)する力」、「人と交流する力」というものでした。

(スライド15)「学生交流に参加して学んだこと」では、農業の理解に関わる回答では、「農家の生の声を聞き、農家の現状を知ることができた」、「秋田県や大潟村の特徴を知ることができた」、3番目は「農家は周りに流されず目標に向かって進むべきだと考えることができた」、多分周りに流されず目標に向かってすすむ農家が視察先におられたということだと思います。次は「農業に対する悲観的な見方がプラスに変化した」。

気づきや勉学への意欲に関わる回答では、「各大学における活動紹介に多くの驚きと発見があった」、「農業に対する学生の多様なイメージや思いを知ることができたので、広い視野を持てるようになった」、「全国から集まった学生との交流を通じて、農業に対する興味と関心をより一層深めることができ、地元の農業をもっと知りたいと思った」というようにあげています。県立大学の学生の立場でいえば、例えば明治大学などいわゆる首都圏から来る学生と話をすると、「どうも私達は農業あるいは農学を学ぶのにとてもいい場所にいるんだな」というのに気づいたというような具合になります。

(スライド16) 以上のように、いろいろな能力あるいは意欲を高めたのですけれども、その要因としては、

「学生の主体的な活動であった」ということ、それと「大学を異にした、大学が違う学生の交流であった」ということがあげられます。大学が違うということは、その大学の個性に影響を受けた学生が集まってきたというように考えても良いと思います。しかも1日だけではなくて、3泊4日という合宿形式ということで、お互いに刺激や気づきを与えて、農業や農学への勉学意欲が高まったように思います。

4. まとめ

(スライド17) まとめます。まず学生の成長の上で必要なことの1つとして、私が考えるのは「自分が〇〇をしたい」という自発性を育むこと。そして集団の中で「自分が皆の中で〇〇をする」という自主性がとても大切。さらには「社会の中で自分が成長し、社会を良くする」という社会観というものも育っていくことが大切なのではないかと思っています。

以前の話ですが、学生交流を経験した2年生が3年生になったときに、その学生が主に中心になって、秋田大学と国際教養大学という秋田県内にある2つの大学に声をかけて3つの大学の学生が集まって交流するという企画をしたことがありました。恐らくそういう学生などは、一番上に書いてある「社会のなかで自分が成長し・社会を良くするという社会観」のようなことも徐々に考えつつあつての行動なのではなかったかと思っています。

まとめると、学生の成長のためには、学生はたくさん色々いますので、まず多様な舞台があることが重要なのではないかとということ、押しつけでない、正課ではなくて課外であるということが良かったのではないかとと思うのですが、そういった舞台作りが重要と思います。このスライドの中では、やはり自発性を引き

<p>Q2. 学生交流に参加して学んだこと</p> <p>〈農業の理解に関わる回答〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家の生の声を聞き、農家の現状を知ることができた ・秋田県や大潟村の特徴などを知ることができた ・農家は周りに流されず目標に向けて進むべきだと考えることができた ・農業に対する悲観的な見方がプラスに変化した <p>〈気づき、勉学への意欲に関わる回答〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各大学における活動紹介に多くの驚きと発見があった ・農業に対する学生の多様なイメージや思いを知ることができたので広い視野を持てるようになった ・全国から集まった学生との交流を通じて、農業に対する興味と関心をより一層深めることができ、地元の農業をもっと知りたいと思った
--

スライド15

<p>全国農学系学生交流における大学生の成長</p> <p>「学生交流」により、学生は農業の捉え方を深め、農業に関する意欲や農学を学ぶ意欲を高めた(アンケート結果より)。</p> <p>上記の要因</p> <ol style="list-style-type: none"> ①学生の主体的な活動であったこと 秋田県立大学学生・・・企画・実施の主体 他大学学生・・・主体的な参加 ②大学を異にした農学系学生の交流であったこと* <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>* 大学の個性(大学の特長・立地)に影響を受けた学生 × 農業を通じた交流(合宿) ↓ お互いに刺激や気づきを与え、農業や農学への勉学意欲を高めた</p> </div>

スライド16

出すということが重要で、そのためには感動や気づきというようなものが与えられる場が大切なのではないかと思います。

以上、課外における大学生の成長の舞台作りと学生の成長についてお話をしてきました。

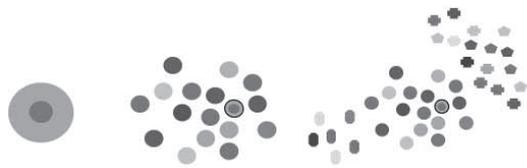
(スライド18)最後に薫風・満天という言葉、ちょっと変わっているのですけれども、この名前は、学生時代の成長をもとに社会に出て、社会に薫風を送って満天の星のごとく輝く人物群となることを期待して、そんな意味合いを持って名付けました。

そういった学生の1人が、ある時にこの写真の牧草を丸めたロールの上に乗っかって遠くをながめている

のを、朝早く見たことがあるのですけれども、私は「ああ、どんなことを考えているんだろうな」というふうにして見えていました。それ以来、県立大学の学生には、「このロールは結構数がたくさんあるので、いつでもいいから来て遠くでも眺めてみたら」なんて話を時々しますが、学生は苦笑いしています。

本日お話しした学生の成長を促す諸活動に対し、大潟村や男鹿市をはじめとする市町村、そして地域の多くの方々に、多大なご支援をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

「自然・農、人、社会との交流」、「農学系学生交流」→学生の成長



社会のなかで自分が成長し・社会を良くする という 社会観

自分が皆のなかで〇〇をする という 自主性

自分が〇〇をしたい という 自発性

自発性を引き出すことが重要(感動・気づきが重要)

学生の成長のための「多様で さりげない」舞台作りが重要

スライド17

学生時代の成長をもとに
社会に薫風をおくり
満天の星のごとく輝く人物群となることを...



講演内容
「課外」における大学生の成長の舞台作り・学生の成長

スライド18